

坪田譲治と陶淵明

—小説『蟹と遊ぶ』論—

一、はじめに

私はかつて坪田文学における中国漢詩文の受容について、『唐詩選』を中心に検討してきた（『坪田譲治と中国文学——漢詩文受容の諸相——』『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第一二号、二〇〇一・一一）のであるが、そんな盛唐の詩人たちが人生の先達として、また詩作の手本として仰いだのが東晋の詩人陶淵明であり、彼は詩聖として慕われ、中国の詩歌史上において偉大な詩人の一人として尊敬されていた。王維は陶淵明を再評価し、唐代以前におけるもっとも偉大な詩人として位置づけ、〈傾倒して強ひて行き行き、酣歌して五柳に歸る〉（『傾倒強行行、酣歌歸五柳』『偶然作其四』）と歌って陶淵明の生き方を理想としたのである。酒仙と称された李白は酒の風雅を愛する者の先輩格である陶淵明を念頭においた詩を作っており、陶淵明の桃源郷を意識して作ったものと思われる（『桃花流水杳然去、別有天地非人間』『山中問答』）非ざる有り。『桃花流水杳然去、別有天地非人間』『山中問答』の一句には、李白の恬淡とした生きざまが凝縮されている。また、

劉

迎

宋の詩人蘇軾（蘇東坡）は陶淵明を称揚して、〈吾、詩人において好むところなし、しかして独り淵明の詩を好む。淵明詩を作ること多からず、然れども質にして質は綺。癡せて質は醜ゆ、曹劉鮑謝李杜の諸人より皆及ぶことなきなり〉（『吾於詩人無所甚好、獨好淵明之詩。淵明作詩不多、然其詩質而實綺、癡而實醜。自曹劉、鮑、謝、李、杜諸人、皆莫及也。』『東坡續集卷三・和陶詩一百二十首』）と言うが、晩年にいたつていよいよ陶淵明に傾倒し、そのすべての詩に和することを試みるとともに、自身の挫折を陶淵明の不遇に重ねて、そこから生きる力を汲み取つたのである（中谷孝雄著『陶淵明』新選詩人叢書、南風書房、昭三三・六を参照）。かくして唐宋以降に輩出したほとんどすべての詩人は、陶淵明に倣うとか、陶淵明を慕うとかいった詩題のもとに、陶淵明の作風を意識しながら詩作したといつて過言ではあるまい。

日本における陶淵明の受容については、伝来の時期は定かではないが、奈良時代以前にすでに舶来されており、平安時代になると、淡海真人福良満の「早春田園」や菅原道真の「殘菊詩」など

のように、漢詩集には明らかに陶淵明の詩をふまえた表現がみられるのである。陶淵明の作品が飛躍的に多く読まれたのは江戸時代であり、藤原惺斎・林羅山・荻生徂徠・太宰春台をはじめ多くの儒者、詩人、文人が陶淵明の詩文に深い関心や興味を抱き、俳諧の世界でも、芭蕉・蕪村・一茶の句に陶淵明の詩を俳題にしたり、俳諧化したりしたものがある。明治期以降は盛んに西欧の文学が移入されるようになり、次第に漢文学の素養を必要とする度合いが減少していくが、陶淵明の詩への関心が依然として衰えることなく、その痕跡が多く作品にうかがえる。例えば、宮崎湖処子は、散文詩『歸省』（明二三・六）で全九章からなる各章の冒頭に、陶淵明の詩を置いてから自らの半生を述べているし、国木田独步は、陶淵明の作に題名やヒントを取った『歸去來』（明三四・五）を著し、田園生活や風景の価値の再発見による其の自由を追求しようとしたのである。また、夏目漱石は、『草枕』（明三九・九）の中で淵明の詩「飲酒」を引用して、西洋の文学芸術が人間社会を中心とするのと対照的に、東洋の詩歌は社会をはなれ自然と一体となっていて、〈採菊東籬下、悠然見南山。；超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。〉と書いている（蒲谷武志著『陶淵明―「距離」の発見』岩波書店、二〇二・九を参照）。

一方、讓治は早くから陶淵明に深く傾倒し、その風流隠逸なる生き方と詩風に並々ならぬ共感を寄せていたのである。彼は陶淵

明と同じように田園の生活をこよなく愛し、また故郷の田園風景を好んで描いたのである。讓治には陶淵明の詩をそのまま引用したり、そこからヒントを得て作ったと思われる作品が多くあるが、いずれも陶淵明の「田園自然」の世界が通底しており、その上に讓治ならではの創意を生かした新しい趣向のものである。

本稿では、坪田文学における陶淵明の受容について具体的な作品に即して検討するとともに、讓治の田園自然への思慕およびそれによる坪田文学の変容を浮き彫りにしてみたい。

二、「田園自然」に託した思い

陶淵明（三六五～四二七）は陶潜とも呼ばれ、紀元四世紀の東晋時代の詩人で、田園詩の創始者である。没落した貴族の家庭に生まれ、生活のために不本意な地方官の職に就いたり、いくつかの軍閥の属僚を経験したりした。四一歳でまた政府の役人として郷里潯陽とは程遠からぬ彭沢県の県令となったが、若い上役が視察に来るから礼服で出迎えよと言われたのに対して、〈我五斗米の為に腰を折りて郷里の小人に向かう能わず〉（吾不能為五斗米折腰、拳拳事郷里小人邪）『晋書・陶潜伝』卷九三）と言ってさっさと職を投げ出し、故郷に引き揚げてしまった。それから彼は二度と政府の役人になろうとはせず、かねてからの願望であった郷里の田園に帰居して自ら鋤をとって農耕生活を営み、貧苦に苦しみながらも六三歳で悟りの境地に達したように、その生涯を開

じた。

陶淵明は生涯貧しい生活に甘んじ、自らを厳しく追及した。四一歳から六三歳までの約二三年間（四〇五―四二七）におよぶ隠居生活の期間は創作がもっとも豊かに行なわれた時期で、多くの田園詩が作られた。その中で田舎の暮らしや田園の風景などが初めて詩の重要な対象となり、詩に歌われている。すこぶる平淡のようであるが、その平淡はみな自然より入り、そして深く基づくところがある。田園生活は陶淵明によって純粹なもの、美的なものとなされ、苦痛の多い現実からの「避難所」となったものの、その精神においては高遠なる理想にあこがれると同時に、現実の世界を直視し、東晋の重鎮でありながらついには篡奪者となった劉裕を痛烈に批判した「述酒」のように当時の政治や社会を風刺する詠懐詩も数多く創作するなど、俗世間を忘れる（超越する）ことはなかったのである。

後世に伝えられてきた陶淵明の詩文は百余首、散文一〇数編であるが、中国の文学史上で非常に大きい地位を占めている。陶淵明の生きた東晋時代は形式主義が盛んであり、多くの人々は華麗な言葉や形式ばかりにこだわっていたが、陶淵明は田園詩という新しい題材による詩の世界を切り開き、古代の素朴な風格を引き継いでおり、しかも活気にあふれ、素朴で流暢な言葉を駆使することで、詩の創作のレベルを新たな高さまで引き上げたのである。こうした自然を崇拜し、誇り高くて、素朴で率直な人柄は中国の

歴代の文人によって高く評価されている（中谷孝雄著『陶淵明』新選詩人叢書、南風書房、昭二三・一六を参照）。

陶淵明の詩の重要なテーマは、田園生活へのあこがれである。彼は自然の風物を自然のままに歌い、自然と一体になる生活のなかにこそ、「真」の人生の喜びがあると主張し、その作品に描かれる自然は田園生活に密着し、自らの日常生活の体験に根ざした具体的な内実を持ったものとして描かれており、鮮やかで暖かい人間味や枯淡の風があふれている。（此の中に真意あり、辯ぜんと欲して已に言を忘る。）（此中有真意、欲辯已忘言）（飲酒其五）は、透明な夕暮れの空気の中を山のねぐらへと帰る飛鳥を見ての感慨であって、彼は人生の真諦を悟り切ったのである。これは、のちに自然に真（道）があり美があり、その自然と渾然一体となった境地を求め、田園に帰るといふ中国文学の自然観を代表する言葉となっている。

陶淵明の詩文において「自然」という言葉の登場は四カ所あり、それぞれ（神自然を釋く）（神辨自然以釋之）（形影神三首・序）、（質性は自然）（質性自然「歸去來兮辭」、《復た自然に返るを得たり》）（復得返自然）（歸田園居五首・第二）と《漸く自然に近し》（漸近自然）『晋故征西大將軍長史孟府君傳』であるが、いずれも「自然は人間と世界が共存する理想の状態である」という老莊思想に基づき、前の二つは本質の根源という意味合いを、後の二つは価値の回帰すべき方向という意味合いを有するもので、

陶淵明がその生の道程全体をもつばら「本真への回帰」、「自然への回帰」の体現として捉えていることがうかがえるのである。このことについて中国文学思想学者の徐復観は、「老莊思想、とりわけ莊子の自然思想の文學の面における成果と收穫として、第一に推すべきものは陶淵明の田園詩をおいてほかにない。」（『中国藝術精神』台北・學生書局、一九六六・一）と高く評価している。陶淵明の詩に大きな感銘を受けた譲治は、「自然」への把握はそれほど哲理的で深いものではないものの、同じく自然を友とする「自然と人生」という摂理にもとづき、自然を人生と結び付けて考えている。彼は自然の中に自我を置いて、大自然と自己とを一つにするような、（いつも自然的、即ち自然と同化してゐる自然の中の人間生活）（『野尻雜筆』）【『中外商業新報』昭一五・六】を理想とし、自然との交流、自然の賛美と憧憬、自然への回帰そして一体化などを求め続けていたのである。むろんその基底には、「自然は悠久にして、人生は須臾である。」（『赤城大沼にて』）【『花椿』昭一三・一〇】という認識が宿されており、悠遠なる自然に対する人生のはかなさという無常観に支えられて展開されている。彼の性格の中心を占めたのはやはり自適と自然を愛するものであったが、（然し鳥の如くに空高く飛び、魚の如くに自然の中に遊ばんにも、私如きは微力短才、一日として生活のことを忘れる譯にはゆきません。）（『鮒釣りの記』）【『文藝首都』昭一一・一二】と、彼は陶淵明のように田園に帰って悠々自適で自然を楽しむことが

できなかった。そして家業をめぐる親族間の骨肉相食む争いのため、「早く已に戦場」となった故郷は、彼にとつて苦痛以外の何物でもなかったが、しかし、（私などは、意識的にはいつも故郷を離れたいと考へながら、書くもの、書くものが、凡て故郷についてのことばかりであ）（『石井村島田』）【『新潮』昭一三・七】といったように、その心をささえる精神的支柱となり、大きな原動力となるのである。

私の心中の故里は：昔ながらの岡山縣御野郡石井村大字島田のそれである。田圃の中の小さな村である。家數二十にみたず、殆ど兼葑で、柿の木がどここの家でも枝や幹を曲りくねらせ、寒山拾得の姿で立つてゐた。夏はその幹に蟬なきしきり、秋はその枝に熟柿が下つてゐた。が、そんなことより、私に忘れ難いのはその村を流れる四條の川である。二つは村の北と南を流れ、二つは村の真中を流れてゐた。川岸には今頃になれば水楊生ひ茂り、その若葉は水の半分を隠してゐるくらゐである。川の水は昔は飲水に使つてゐたのであるから、清冽と云へなくとも、決して濁つたものではなかつた。藻が川底をゆらゆらとゆれてゐて、その間を色々な魚が泳いでゐた。（中略）

兩岸は何處までも田圃つゞきで、その田圃はその頃菜の花の黄一色。處々にげんげの花の盛り上つて咲いてゐる田圃があつた。そんな處へ來ると、流れにまかせてゐた船をとめて、そこに子

供達は花の上で相撲をとつた。川は幾つかの橋の下をくぐり、幾つかの村の中を通り、そして末は大きな池の中へ流れ込む。そこには菱が一面に浮いてゐる。そこで私達は船をゆすつて日の暮れかゝる迄遊び戯れ、夕もやが池の上にかゝる頃になつて、俄に可重や狐が恐ろしくなり、大急ぎで船を引いて歸つて来る。歸る途中、北のほうの山の中腹にある寺から、鐘の音がオーン、オーンと翫えたものである。

〔班馬いな、く〕〔班馬鳴く〕、主張社、昭一一・一〇〕

譲治の描く自然は、彼自身の生活に密着した故郷にあり、いわゆる〈手で触れるような〉(佐藤さとし「坪田童話の秘密」)『坪田譲治童話全集巻一四・坪田譲治童話研究』、岩崎書店、一九八六・一〇) 實在感のある田園のそれである。幼少年時代を過ごした岡山の自然が彼の脳裏に深く滲み込み、その時の自然に対する印象が、彼の作品の上に現れている故郷の自然なのである。彼は故郷の素朴な自然の中に息づく人間(子どもを含む)のいとなみの喜怒哀楽を詩情ゆたかにうたいあげ、読者にしみじみと自然と人生を考えさせるのである。

三、帰還不能の田園

譲治が好んで詠んだ陶淵明の詩の一つに〈帰りなん、いざ、田蜀まさに蕪れなんとす〉というのがある。これは陶淵明が四一

ですべてを投げ打つて故郷の廬山の麓に帰つてきたときの詠嘆をつづったかの有名な『帰去來の辞』の冒頭に置かれるもので、官を辞して帰郷し、自然を友とする田園生活に生きようとする決意を述べたのである。

歸去來兮 歸りなん いざ

田蜀將蕪胡不歸 田園 將に蕪れなんとす胡ぞ歸らざる

既自以心爲形役 既に自ら心を以て形の役と爲す

奚獨懷而獨悲 奚ぞ獨懷して獨り悲しむ

悟已往之不諫 已往の諫めざるを悟り

知來者之可追 來者の追ふ可きを知る

實迷途其未遠 實に途に迷ふこと 其れ未だ遠からずして

覺今是而昨非 覺る 今は是にして 昨は非なるを

舟遙遙以輕 舟は遙遙として 以て輕し

風飄飄而吹衣 風は飄飄として 衣を吹く

問征夫以前路 征夫に問ふに 前路を以てし

恨晨光之熹微 晨光の熹微なるを恨む

以下大意を記せば、さあ帰ろう、田園が荒れようとしている。

いままで生活のために心を操縦してきたが、くよくよと悲しんでいても仕方がない。今までは間違っていたのだ。過去のことは今さらとり返しがつかない、これからは自分のために未来を生き

よう。道に迷っても決して改めるに運くはない。今の考えの正しいことを知るにつけても、過去の非をますます痛感する。

陶淵明の心の中の田園は、何時となく彼の心そのものとなっていた。田園に帰るということは、自分の性情の自然に返ることを意味するといつてよいであろう。その意味で、『帰去来の辞』の一篇は、従来陶淵明がしばしば詠つてきた詩境の総決算であり、自然を友とするという人生哲学の確立であつた。彼は生涯この詩境を守つて、繰り返し同じことを詠いつづけた。その詩境は年とともに深まりこそすれ、いささかの動揺もなかった。一度確立された詩人の世界というものは、もはや何物をもつてしても動かせないものである。したがつて、陶淵明にとつて、『帰去来の辞』はその生涯を決定する画期的な作品であるといつても決して過言ではあるまい。

譲治の作品における陶淵明「帰去来の辞」の引用例が確認されるのは、短篇「町から歸つた女」や随筆「野尻雜筆」など四つの作品であるが、いずれも譲治が陶淵明的自然の感情をともなつて故郷の田園風景を描いたものである。短篇小説「町から歸つた女」は昭和五年（一九三〇）三月八日付の『東京朝日新聞』に掲載された作品であるが、原題は「町から歸つた」となつてゐる。

村の娘青山雪子が大阪に出て産婆の修業を終えるが、（余りに美しかったため）、彼女はダンサーになり、またダンサー場のスターとなつて、とうとう妊娠してしまつた。村に歸つてきた彼女

は、（監禁同然）に伯父さんのところに預けられ、村人から「淫蕩の婦」と輕蔑されて、（毎日子守歌を歌ひながら、遙大阪の空を望みながら、その子の父をしのばねばならない）ことになつたという話である。この不憫な娘を賛美し同情する村の若者たちと、伝統な風習を固く守ろうとする保守的な村人たちとの意見の対立や心の葛藤を的確に捉え、田園風景は變わらないものの、新時代、新文化がもたらされた村人の意識的變化を巧みに表現している。中にはこんな一節が見られる。

昔を懷へば――

さうだ。明治年間のことである。岡山市の町はづれ、一つの路切を越すと、幕を張つたやうな空の下に、遠く打ち續く一面の青麥の田畝。その端つこに小さく遠い私の村。一本の高い松がそびえ、その下に南蠻風の枝をさし交してゐる青葉の柿の樹。七八つしか見えないわら屋根と、その間に光る白壁の土藏。その頃私はその村をさして、麥の間を、かはやなぎの茂つてゐる小川の岸を、――歸りなん、いざ、田園將にあれんとす。いかで歸らざらんや――と歸つて來たものである。

その頃、その川にはコヒやナマツが住んでをり、深い所には河童さへゐたのである。田畝にも長く末を引いた農夫の歌が聞え、寺の朝夕の鐘の音は村や田畝の末々までゆるやかに響き渡つた。その鐘の音を聞きながら、幼い私がキツネにはかされは

しまいかと心配しながら、麥の中を走つたことはたび／＼である。キツネも實際その頃は人をばかした。(※野線劉、以下同様)

〔晩春懷郷〕竹村書房、昭一〇・一〇〕

短い文章であるが、すこぶる構成的脚色的で、これを例えれば故郷の初夏などと題する一枚の風景画に仕立てることも不可能ではない。このように少年時代を懐かしむ心が彼の意識下にあつて、時代の波にさらされて変わらうとする故郷の自然を案じつつ、彼はむかしの長閑な田園の風物を切なる思いで描いたのである。

実は諫治の文学を丹念に読んでいくと、多くの場面でこのような「田園風景」が登場し、特に家業の島田製織所に専務取締役として勤めていたが、突然解任されたため、「現実の故郷」を失い、生活の糧もなく裸に立たされた昭和一〇年（一九三五）前後の作品では執拗なまでにくりかえし描かれている。彼の感情や志向がすべて「田園風景」に集約されていることが感じられる。この「田園風景」について諫治は、随筆「野尻雜筆」（前掲）の中で次のように述べている。

故郷といふものは多く思ひ出の中に、過去の中にある。私の故郷などは卅五年以前のもので、その昔美しく静かであつた。山川草木が今は凡て場末の町となり故郷などとは言ふことも出来ない。そこで日本人の故郷といふ觀念は凡そ田園といふ言葉

で表現さるべき姿のものであると言つたら如何であらう。歸りなんいざ。田園まさに荒れんとす。――これである。陶淵明が千數百年前に言つてのけたそれである。その後この故郷田園の姿も時代と共に變つたであらう。

〔隨筆集「息子かへる」青雅社、昭三二・一〇〕

この引用に示されたように、彼のいう「故郷田園」は明らかに陶淵明に代表される中国の自然觀を基盤とするものであり、おのれに絡みついてくる社会の絆をふりほどき、人間本来の姿に立ち返り得る世界であつた。つまり諫治がその故郷田園の風景と意識するものは、幼少年時代に過こした岡山の土俗的風土的な要素と陶淵明詩の鮮やかで清雅な風格が重なり合つて合成された、いわば「觀念的」な景色であつた。同じ特徴は、彼のほとんどの作品にも認められ、宛然として陶淵明らしい風格で展開され、中国的自然を意識した造りとなつてることが指摘できる。

私は心の内に一つの世界があるのを覚える。そこは時のない永遠の國の様である。眼をつぶれば、その世界が心の内に展げて行く。そこには七つの時、十の時、二十の時、色々の時の自分がある。また祖父が居り、父母が居り、兄弟が居る。また親しかつた、或は今も親しい自分の凡ての友人が居る。彼等の中には今は此世にゐないもの、またゐても行くのに二ヶ月もか、

る南米の果てに住んでゐるものもある。けれども彼等は凡て此心の國の中に生きてゐる。静かに落付いて、何の憂ひもなく、それのみでなく私にはその國も空も空氣も蒼く静かに澄んでゐる様に思はれる。そしてその國には充ちてゐる解らない一つの力がある。私の祈祷は、その國を思ふかへて、その力に人々のまた自分の静かな幸福を祈ることであるのみならず、私の創作は凡て此心の國から生れる。

〔編集室より〕『科學と文藝』、大六・三

しかし、故郷は彼にとつて、〈再び歸ることの出来ないところ〉（『石井村島田』前掲）であり、〈再び達し難き樂園〉（『故園の情』『都新聞』昭九・四）であつて、いわば帰還不能の田園なのである。彼は「現実の故郷」を捨てて、「心の故郷」を求め続けることに決心したのである。

四、「蟹と遊ぶ」のふしぎ

こうした「心の故郷」への思慕を具象化した作品が、小説「蟹と遊ぶ」である。それは陶淵明の「桃花源の記」を踏まえて作つたと思われる。

「帰去来の辞」が陶淵明の「田園詩人」「隱逸詩人」としての代表的側面が描かれた作品だとするなら、「桃花源の記」は東洋のユートピア・理想郷の表現である桃源郷の語源となつた作品とし

て名高い。陶淵明は晩年に有名な散文「桃花源の記」を書き、長い間その胸中に温め、慕い、そして希求しつづけた眞実の人間の生活のある社会を、簡潔で抑制のきいた筆致で描いて、ユートピア社会を表現したのである。あらずじはこうである。

晋の太元のころ、武陵源の漁夫が川に舟を浮かべてすすむうち、突然、桃の花の咲きそろう林に出た。兩岸に桃の花が咲き誇り、花びらがはらはら舞つてゐる。林は水源で尽き、一つの山とほら穴があつた。くぐり抜けるとからりと開けた土地があり、美しい田や池がひろがつてゐる。村人は戦乱のことも時代の移り変わりも知らず、平和に暮らしてゐた。漁夫は歓待され、数日逗留して帰り、太守にかくかくしかじかと話した。太守は漁夫に人をつけてそこへ行かせようとした。しかしもはやその道を見つけることができず、その後もその地を訪れるものはなかつた。

この散文は美しい想像の世界であり、情勢が激動する時代に人々が安定した社会へ憧れる気持ちを表すものである。桃源郷の物語として、あるいは別世界物語の香り高い嚆矢としても、世界の文学史上で最も早い到達を示している。

陶淵明の描いた「桃源郷」は、桃の花咲く水源の奥の密かな土地であり、この世とは別の世界ではなく、この世に対しては入り口を開いているが、そこへの再訪は不可能であり、また目的を持つて追求したのでは到達できない、いわば地上の樂園だということである。再訪できないのは、それがこの世に存在しない架空の

土地とされるトマス・モアのユートピアとは違つて、日常生活を基底とするもので、すでに知つてゐるものであるため地上のどこかではなく、心魂の奥底に存在しているからである。

譲治の短篇小説「蟹と遊ぶ」(『文科』昭七・三)には、「桃花源の記」と同じような展開が見られる。

兄弟のいない三平は、兄さんがはしくてたまらなかつた。秋の初めに、彼は不思議な夢を見て、兄さんと出会つたことを夢想した。

三平は釣棒を荷いで、魚の籠を腰にぶら提げて、川岸を昇つて行きました。折々籠の中の魚がバタツバタツと跳ねるので、後向きになつて、草をのけて籠の中の魚を覗きました。魚は何かものを云ひたさうな顔をしてゐました。そんなにも生き生きとしてゐるのです。三平は話しかけたら返事をしたかも知れませんが。

その内段々四邊の景色が不思議に思ひ出しました。見たこともない處です。空が不思議な位蒼いのです。雲だといふのに、その蒼い空に星がキラキラ光つてゐるのです。草の色がまた不思議な程青い色をしてゐるのです。繪に描いたやうに濃い青色です。川も段々浅くなりました。川底の砂がまるで黄色なやうな色をして居ります。その上を水がチヨロチヨロ流れてゐるのです。そこをまた岩魚のやうな、香魚のやうな長細い魚が泳い

て居ります。いいえ、そればかりか見れば遠くに低い丘があつて、丘の中腹に朱塗の塔が立つて居ります。塔は五重の塔で、塔の後の空に美しい虹が見えます。虹は丘から丘へクツキリと、丁度塔の飾りのやうにかゝつて居ります。

何だか是非は不思議な處だ。支那といふ處ではないかしらん。と斯う三平は考へました。(中略)

丘の下に大きな一枚の岩があるのです。その下から水が流れ出て居ります。それがこの川の源です。その側に桃の花が咲いて居ります。とても美しい、目のさめるやうな桃の花です。その側に水車が廻つて居ります。水車の側の棒の上に、それは美しい一羽の黄色な鳥がとまつて居ります。それはいつ迄も動かず、ちつと水車の廻るのを見て居ります。

やや長い引用であるが、明るい野のひろがり、漁夫の格好をする三平は一人で野歩きに浮き浮きした気分。川を廻つていくと、道はしだいに奥へ奥へと入り込む。丘に五重の塔や水車があつて、桃ばかりの林に出会う。そして、桃の枝から枝へ行き交う黄色の鳥。ここには、(蒼い空) (月色の草) (黄色い鸚哥) (赤い五重塔) (桃の花) そしてその背後に立つてゐる (七色の虹) などふだん見かけた風景から、あたかも別世界が開けたようである。

この作品は素朴かつ新鮮で、さらに「支那といふ處ではないかしらん」などとおるように、構造的にも手法的にも「桃花源の記」

に通うものであり、陶淵明の作品を意識して作ったことが明らかである。むろん、これは讓治が心の底で清逸超絶的な桃源郷を憧憬していたもので、これから迷いのない生活を送ろうと自分に言い聞かせ、無為自然に身をまかせて生きることへの願望があったに相違ない。

三平は、そこで「黒い服に黒いズボン、靴まで小さな黒い靴」をしている一人の「支那」の子どもが手品をやっているのを見た。彼は三平の存在には気づいていないようで、へいつ迄もいつ迄も茶碗を開けたり伏せたりして素早く稽古をするが、その側に「眞黒の支那服を着た大きな支那人」が恐ろしい様子でじつと見ていた。その子供が三平の兄さんなのです。兄さんは幼い時に支那の手品師につれて行かれて、あんなに支那手品師になつてしまつてゐるのです。…可哀想な兄さん。と三平はそう思った時、夢がさめたのである。全身黒一色の「支那」の子どもに眞黒の「支那」人と、中国人の子どもと中国人が不気味に仕立てられて、中国に対する差別的な意識が働く一方、「黒一色」の背景色は人間に内在する不安定な心のありようの象徴的表現と受け止められ、厳しい現実の中で歪められた子どもの心理を反映するのである。

春の初めのある日、三平は釣竿をもつて鯉を釣りに出かけた。一つの橋の上で彼は夢で見たのとそっくりの景色を目にした。

行けば行く程見たことのある景色です。次第次第に一層面白

くなりました。一番終りまで行つたら、どんなに面白い處へ出るでせう。とても楽しいことが待つてゐるやうです。(中略)

處が、おや、これはどうでせう。彼方に丘があります。丘の上に五重の塔が立つて居ります。そして丘の下には一つの大きな岩があつて、岩の側では水車が廻つて居ります。さうです。水車が廻つて居ります。そして岩の上にはとても綺麗な桃の花が咲いて居ります。桃の枝には、目白でせうか、鸚哥でせうか、黄うい鳥がとまつて居ります。美しい黄うい鳥が繪に描いたやうに、ちつと静かにとまつて居ります。…あの時は何だか氣味の悪いやうな不思議な景色でしたが、今は眞晝間、不思議なことも、氣味の悪いこともありません。何となく美しい楽しい處です。

三平は夢の兄さんが「支那」手品を稽古していたところへ行つてみたが、そこにはそんな跡さえなく、砂の上に一つ穴が開いていて、一匹の蟹がブツブツ泡を吹いていた。三平は蟹に触つて遊ぶのに夢中になり、もう兄さんのことなどを忘れたのである。締めくくりはこう結ばれる。

處が、翌日から三平は病氣して何日も遊びに出られませんでした。その内いつの間にか三平はそこを忘れて居て、夏の初め頃、ふとそこのことを思ひ出して、三平はまた釣竿を荷いで家

を出ました。然し、どうしたことせう。村のどの方へ歩いて行つて見ても、もうそこへ行く道が解らなくなつて居りました。

空想といへば空想であつたが、久しい前から讓治の心の地に描かれた田園というのが、自然にそういう形を取つて現われてきたものと言つてよからう。これはいうまでもなく彼の田園に対する深い愛情が描きださせた夢であつた。

一篇の想意は、なしかに故郷岡山の風土自然に根ざした作者の心象スケッチを、秋・春そして夏の明るい自然の中に描いてみせながら、陶淵明風の情緒や色調の感じを出したもので、精神の高い境地をめざして描いたものであらう。自然の中に人生の価値が存在することに、讓治は気がついた。この作品はのちに讓治に自然によく調和する「董心浄土」といふべき子どもの世界へ飛び込むことを決意させる、一つの基盤となつたと思われる。

五、終わりに

以上に述べたとおり、讓治は陶淵明の詩想を吸収し、それを思わせるような作品を次々と書き上げたのである。しかし、それは単なる模写ではなかつた。「蟹と遊ぶ」についていへば、確かにストーリーの展開や話の進めかたが「桃花源の記」を土台にしているものの、その指向する桃源郷のイメージは大きく異なっている。「桃花源の記」の漁師が目にした桃源郷のイメージは「普通

の世界と断絶して自若として平和に暮らす人々の様子」、すなわち老子が主張した理想社会の在り方である「小国寡民」といったものであるのに対し、「蟹と遊ぶ」の場合はそんな哲学的把握はなく、登場人物は三平一人しかおらず、自然以外は何も描かれていない。これは自然を友とする讓治の心のあらわれであらう。しかもそこに描かれた田園風景は、どこの田舎にでも見られるように、ごく平凡なものである。こうした怡然として屈託ない自然の中に生きていくことが、当時切迫した生活に苦しめられていた讓治にとっては望ましい理想世界のあり方だったのでないかと思われる。讓治の芸術特徴として第一に挙げられるのは何気なく日常の自然をそのまま描いていることであるが、大切なのは自然と一体化した心で自然を描写しているということである。

ともあれ、讓治の主題としたものは日常のものであり、日常の自然や生活をそのまま作品にした。そのため言葉も平易であり、誰にでも理解できるものとなつた。そして平易ではあるが、その中に深い哲理を込めたのである。このような形式は讓治以前の児童文学にはあまり見られなかつたことである。

テキスト

- (1) 『坪田讓治全集』(一、二巻本)、新潮社、昭五二・一六・五三・五
- (2) 『陶淵明全集』全二冊、松枝茂夫・和田武司訳注、岩波文庫、岩波書店、一九九〇・一一・二
- (3) 『新修中国詩人選集』全七巻、一海知義等注、岩波書店、一九

参考文献

- (1) 『坪田譲治生誕百年記念号』『季刊・びわの実学校』一四号、一九九〇・一
- (2) 『坪田譲治・久保荷の世界』『国文学 解釈と鑑賞』六三巻四号、平一〇・四
- (3) 『粹集／児童文学に描かれた〈自然〉』『日本児童文学』四〇巻一一号、平六・一一
- (4) 小田嶽夫『善太と三平』をつくった坪田譲治 ゆまに書房、一九九八・四
- (5) 中谷孝雄『陶淵明』新選詩人叢書、南風書房、昭三三・六
- (6) 蒲谷武志『陶淵明―「距離」の発見―』岩波書店、二〇一二・九
- (7) トマス・モア『ユートピア』岩波文庫、平井正穂訳、岩波書店、一九五七・一〇
- (8) 『ユートピアと権力と死―トマス・モア没後450年記念―』日本トマス・モア協会、一九八七・一
- (9) 中西一弘編『児童文学物語編―資料と研究―』関書院新社、昭四六・五
- (10) 上笙一郎『日本児童文学の思想』国土社、一九七六・一一
- (11) 山室静『童話とその周辺』朝日選書、朝日新聞社、一九八〇・六
- (12) 西田良子『現代日本児童文学論―研究と提言―』桜楓社、昭五五・一〇

- (13) 西本鶏介『文学の中の子ども―有名作家が描いた子どもの姿―』小学館創造選書、小学館、一九八四・一二
- (14) 日本児童文学学会編『児童文学の思想史・社会史』叢書・研究Ⅱ日本の児童文学五、東京書籍、一九九七・四
- (15) 河原和枝『子ども観の近代―「赤い鳥」と「童心」の理想―』中公新書一四〇三、中央公論社、一九九八・二
- (16) 高橋理喜男『絵本の中の都市と自然』東方出版、二〇〇一・五
- (17) 下川歌史編『近代子ども史年表―昭和・平成編―』河出書房新社、二〇〇二・四
- (18) 北本正章・高田賢一・神宮輝夫『子どもの世紀―表現された子どもと家族―』ミネルヴァ書房、二〇一三・七・一五

【付記】

本稿は福武教育文化振興財団の助成金（平成二四年度）による研究の一部としてまとめたものであります。ここに記して感謝の意を表します。

（りゅう げい）中国江蘇師範大学外国語学院教授